

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00505

研究課題名（和文）ドイツ近代文学における自然観

研究課題名（英文）Nature in Modern German Literature

研究代表者

時田 郁子 (Tokita, Yuko)

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：60757657

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀初頭のドイツ語圏で高まった自然への関心を三つの観点から考察した。一つめは、自然を地・水・火・風から成るとする古来の自然観を踏まえ、啓蒙主義の時代に四大元素の精霊をテーマにした作品が人気を博した理由を考察した。二つめは、世界を旅して旅行記を発表した三人のドイツの博物学者の活動を追い、帰還後に彼らが果たした貢献とその意義を考察した。三つめは科学革命の時期に幽霊やメスメリズムといった超自然現象にあらためて関心が寄せられたことに着目し、詩人たちがこうした現象をどう捉えていたのかを文学作品の分析を通して考察した。以上の三つの面を通してこの時期のドイツ語圏の自然観の一端を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、理系と文系の垣根を越えた学問のあり方が求められているが、19世紀初頭のドイツ語圏において学問は総合的なものであり、自然観という補助線を引いてみると、文学と自然科学が相関関係にあると判明する。本研究は自然科学者が詩人を自負し、詩人が文学作品に自然科学の最新の成果を取り入れた事例の数々を挙げて、学問の専門化が進む以前の状況を提示し、文学的想像力が学問や社会の発展に対して果たした貢献を明示した。

研究成果の概要（英文）：At the turn of the 19th Century German people had the great interests in Nature. According to the Greek Natural Philosophy Nature consists of four elements, namely earth, water, fire and air. German poets in the era of enlightenment told often stories of natural spirits based on the Natural Philosophy. The reason for the popularity of such stories is here considered. Then observing the activities of three German naturalists who traveled around the world and wrote travelogues, the process of getting new knowledge of nature is revealed. Lastly the phenomena of wonders for example, ghost and mesmerism, which German poets made the subject of their works, are analyzed. In this way the ideas of nature among German poets at the time are shown.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：自然誌 精霊譚 探検博物学 メスメリズム 科学

1. 研究開始当初の背景

19世紀は科学の時代であった。ドイツ語圏では博物学者アレクサンダー・フォン・フンボルトがアメリカとロシア・中央アジアを探検し、『影をなくした男』の作者にして植物学者のアーデルベルト・フォン・シャミッソーが世界周航に参加し、多くの文学者たちは伝え聞いた科学的発見や最新の情報を作品に織り込んだ。19世紀の文学者たちが抱いた科学への関心はゲーテを中心に日本で研究されているが、科学的成果を取り込んで発揮された文学的創造性が20世紀文学に引き継がれる連続性は研究されてこなかった。それはドイツ文学史上19世紀後半のビーダーマイヤー期に優れた文学的業績が少ないことと関係があるだろう。本研究はこの空白期間に精神分析を組み込み、19世紀から20世紀の思想的連続性を明らかにする。

自然の中に人間をどう位置づけるかはヨーロッパの精神史上大きな課題であった。ド・ラ・メトリが『人間機械論』(1747)で人間を自らゼンマイを巻く機械すなわち永久機関と見なしたことは画期的であり、ド・ラ・メトリが客死した地プロイセンの詩人たちが彼の考えを受け継いだ。クライストは人形劇の操り人形について考察し、ホフマンは自動人形に関心を寄せた。本研究は、人形を動くものと動かないものに分け、古くからある蠟人形のイメージを踏まえて、19世紀の詩人たちが人形をどう捉え、新たな人間観を形成したのか、考察する。

人間が機械であるならば、心や魂と呼ばれる人間の内面は何か。18世紀末にアントン・メスマーは人間の身体に磁気が流れていると考え、個人治療で患者の身体表面に触れて痛みを軽減し、集団治療で磁気の流れを活性化した。彼の施した治療は胡散臭いものと見なされたが、催眠療法となって後世に受け継がれる。フロイトがパリでシャルコーから催眠療法を学び、精神分析を創始するもこの系譜に連なる。動物磁気への考えは19世紀初頭の文学作品に取り込まれ、20世紀初頭に心と身体の乖離が問題になると再び脚光を浴び、人間の内部に流れる磁気は超越的存在との繋がりの証と読み替えられる。ムージルの「白昼の神秘主義」、デーブリーンの「自然哲学」、ヘッセの東洋思想受容など、合理主義の時代に神秘思想が興隆した背景はここにあると考えられる。本研究は、19世紀の作家が想定した人間の内面と、個人の心から集団の記憶へ考察対象を拡大する精神分析、20世紀の神秘思想の連続性を立証する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、文学と自然科学の交錯に着目してドイツ近代の自然観を解明することにある。19世紀前半のドイツ語圏の自然科学に関する先行研究を踏まえ、文学者が自然科学の成果を受容して、想像力たくましく表現した経緯を検討し、彼らが提起したイメージが次世代の自然科学の発展に、また新しい生活様式の創出に寄与したかを明らかにする。利益重視・実用本位の現代社会において、文学は無用の長物と見なされがちであるが、知識に裏打ちされた想像力と豊かなイメージが生活様式や社会に強い影響を与えることを、具体例を挙げて論じ、21世紀における文学研究の意義を打ち出す。

3. 研究の方法

本研究は以下の三つの観点からドイツ近代の自然観の展開と意義を考察する。

1 新しい人間観

19世紀初頭に人形への関心が高まったのは、人形が人間の似姿と考えられたからである。人間は人形を操る一方、人形のように操られることもあり、人形を介して新たな人間観が提起されたと仮定し、蠟人形と操り人形、自動人形を考察対象に定める。蠟細工の技術は教会への奉納品としての蠟人形制作に始まり、医学分野で用いられる蠟製の人体模型ムラージュによって発展し、

革命前後のパリでムラージュ職人のドイツ人が蝸人形を展示し、見世物興業を行った。操り人形は従来子供向けの人形劇に用いられたが、クライストはエッセイ「マリオネット劇場について」において、人形遣いと人形との関係を神と人間との関係に重ね、人形に新しい光を当てた。この時期に職人たちが制作した精巧な自動人形はヨーロッパ各地で巡回展示されており、ホフマンがこうした自動人形に着想を得て人造人形をメスメリズムに絡めて創出した。クライストとホフマンの作品を分析すると、人間が人形に動きを与えるとき、また逆に人間が何者かに操られるとき、人間はいかに振る舞えばよいのかという問いが生じる。この問いをメスメリズムに絡めて考察し、19世紀初頭の詩人たちが科学的発見を文学作品に取り入れ、独特の文学世界を作り出した様を検討する。

2 精霊たち

自然は人間の外に広がっており、古代ギリシアの自然哲学によれば、地・水・火・風から成るといふ。19世紀初頭のドイツ語圏では地・水・火・風の精霊たちをテーマにした文学作品が数多く執筆・受容されたが、1820年代に精霊の人気は下火になる。具体的に作品を分析して、啓蒙主義が行き渡った時期に精霊という非合理的な存在があらためて受容された理由と、1820年代に衰退していった理由とを探る。

3 探検博物学

自然の探求は博物学者たちの探検という形に現れ、彼らの書いた旅行記が人気を博した。ゲオルク・フォルスターとフンボルト、シャミツソーの世界旅行の過程を追い、その後彼らの知見が受容されたのか考察する。

4 研究成果

上記三つの観点から研究を進めた。

1のうち人形に関して、ホフマン文学における自動人形について論文「自動人形の言葉 E.T.A.ホフマン『砂男』」に纏めた。18世紀後半のヨーロッパにおける幽霊への関心は視霊者スヴェーデンボリの活躍に端を発するため、カントの『視霊者の夢』(1766)などスヴェーデンボリの影響を押さえ、ドイツ語圏で起きた幽霊騒動を概観して、偽視霊者の一人カリオストロ伯爵に着目した。シラーの『視霊者』(1789)とゲーテの『大コフタ』(1792)はそれぞれカリオストロ伯爵をモデルにしており、二人の詩人が偽視霊者に向けた熱い眼差しを明らかにした。次いで、フランツ・アントン・メスマーの活躍を追い、ドイツ語圏におけるメスメリズムの広がりを概観して、クライストがメスメリズムを応用した戯曲を取り上げて、クライスト文学におけるメスメリズムの諸相を解明し、論文「クライスト『ハイルプロンのケートヒェン』の夢」に纏めた。

2に関して、四大精霊が啓蒙主義の時代に復活する経緯を、ロマン派の王様と呼ばれたルートヴィヒ・ティークの知的変遷を手がかりに明らかにし、四大精霊をテーマにしたさまざまな作品を具体的に分析した。ノヴァーリスの『青い花』(原題『ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン』)を大地との関係で読み解き、論文「詩と魔術 - ノヴァーリスの『青い花』 - 」に纏めた。火の精と水の精が父と娘として登場するホフマンの『黄金の壺』を取り上げて、ホフマンの描く精霊界を示し、論文「『黄金の壺』 E.T.A.ホフマンの変奏」に纏めた。

3に関して、フォルスターの『世界旅行記』(1777)、フンボルトの『熱帯アメリカの研究旅行』(1814/19/25)、シャミツソーの『世界旅行記』(1836)を読み解き、彼らのその後の活動を追った。

これらの研究成果を纏めて、『詩人たちの自然誌 - 19世紀初頭ドイツ語圏における文学と科学』という題名の著書を出版する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 時田郁子	4. 巻 42
2. 論文標題 自動人形の言葉 E.T.A. ホフマン『砂男』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ヨーロッパ文化研究	6. 最初と最後の頁 115 - 141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 時田郁子	4. 巻 234
2. 論文標題 詩と魔術 - ノヴァーリスの『青い花』 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 経済研究	6. 最初と最後の頁 55 73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 時田郁子	4. 巻 41
2. 論文標題 『黄金の壺』 - E.T.A. ホフマンの変奏	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ヨーロッパ文化研究	6. 最初と最後の頁 97 124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 時田郁子	4. 巻 40
2. 論文標題 クライスト『ハイルプロンのケートヒェン』の夢	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ヨーロッパ文化研究	6. 最初と最後の頁 89-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------